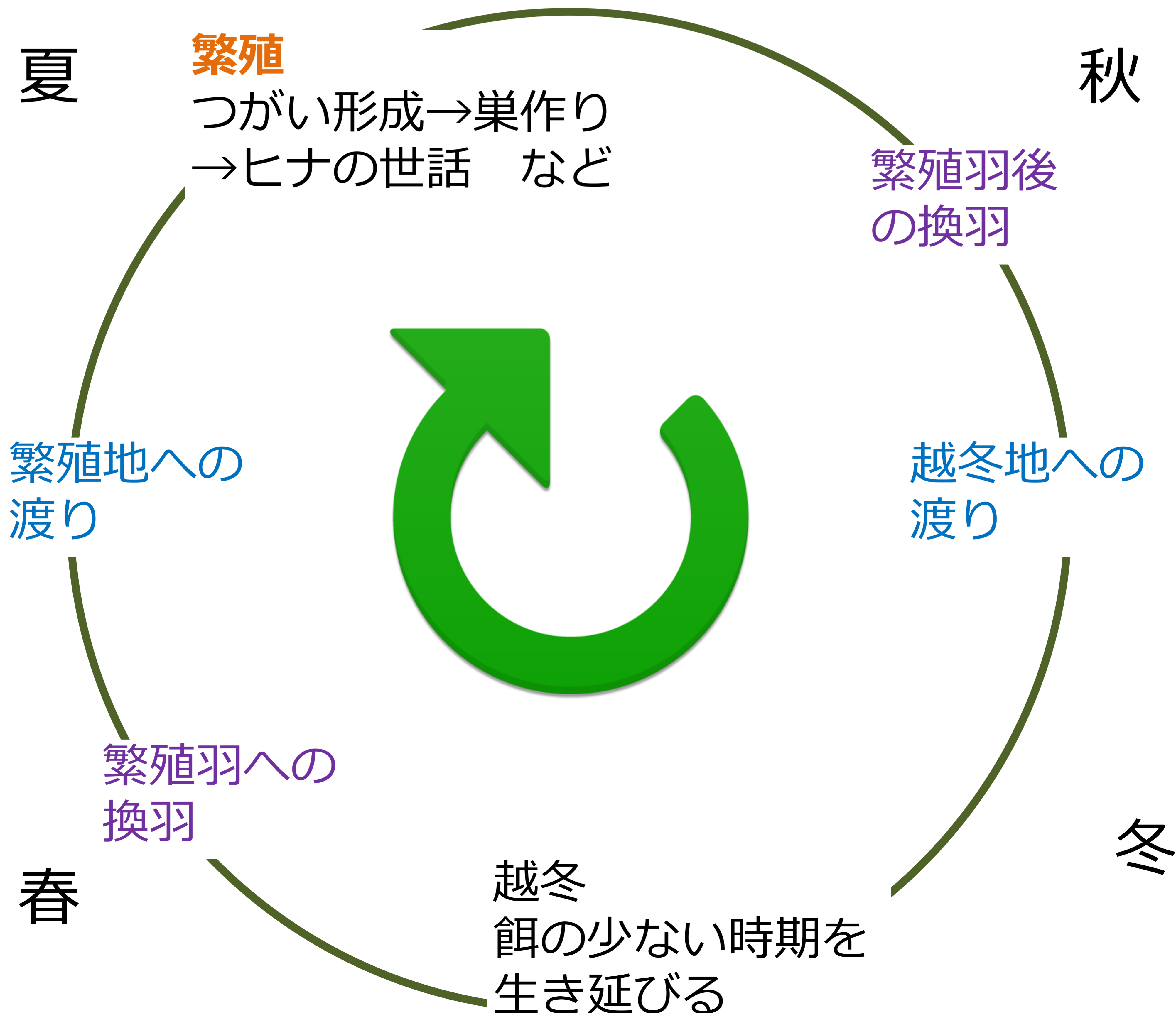


鳥の繁殖と1年のスケジュール

野生の鳥は、一年のうち最も適した時期に繁殖を行います。繁殖は子孫を残すための最も重要なイベントですが、そのほかにも、繁殖場所から冬を越す場所への渡りや、全身を覆う羽毛の交換（換羽かんうといいます）など、やらなければならないスケジュールをこなさなければいけません。

「繁殖」・「渡り」・「換羽」の3つは、鳥にとって大変な活動なので、同時に行うことができません。多くの鳥では、うまくタイミングをずらして一年のスケジュールをこなしているのです。

一般的な渡り鳥の年周期



1年に何回繁殖するの？

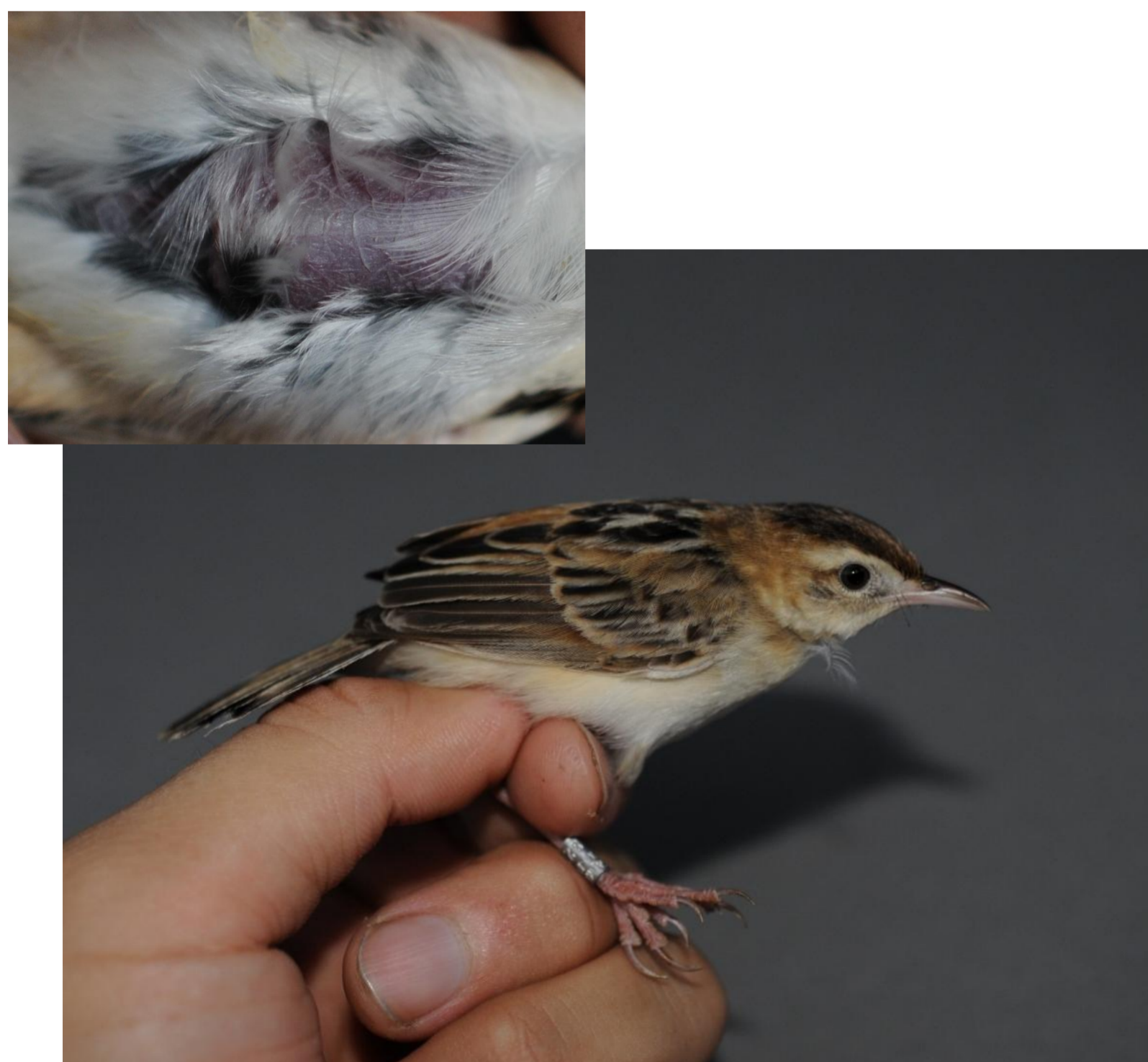
1回繁殖の種



2回繁殖の種



▲1回繁殖と2回繁殖の比較。2回以上繁殖する種では、2回目以降の繁殖が長引くと、その後に行う換羽や渡りのスケジュールがずれ込んでしまう。餌の量やヒナの成長の速さによっても繁殖回数が制限される。



繁殖にかけるエネルギーは大きいため、多くの鳥は1年に1回しか繁殖しません。しかし、寿命が短くヒナの成長期間が短い小鳥には、年に複数回繁殖する種もいます。ツバメやセッカは、年に複数回繁殖する鳥の一つです。

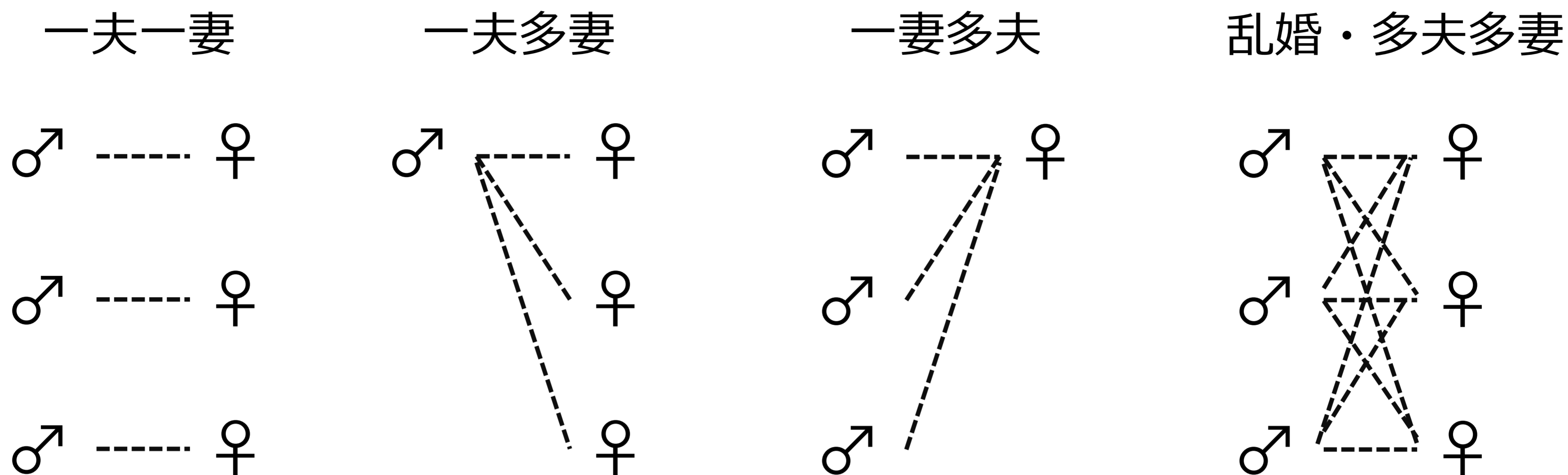
▲発達した抱卵斑(左上)をもっていたセッカの雌幼鳥

海鳥の中には、数年に一度、1年間繁殖せずに体調の回復に充てる鳥もいます。長生きをする海鳥では、状態の良くない年に無理をするよりも、1年休んでその後の繁殖の成功率を高める方が、生涯を通じて育てられるヒナの数が多くなるのかもしれませんが。



▲ウミネコのつがい

鳥の夫婦関係



▲鳥における社会的な関係の例。点線は配偶関係を示す。

鳥類のおよそ90%は一夫一妻で、1つのなわばりに雄1羽と雌1羽の単純なつがいをつくります。実は、一夫一妻は多くの生物の中では少数派な関係です。たとえば哺乳類では、一夫一妻の種は全体の9%にすぎません。

鳥で一夫一妻が多いのは、哺乳類と異なり授乳を行わず、子育てに雌雄が等しく貢献できることと、ヒナの成長が速いので雌雄で力を合わせる必要があるためだと考えられています。



▲一夫多妻のオオヨシキリ



▲一妻多夫のアカエリヒレアシシギ

少数派ではありますが、一夫多妻、一妻多夫、乱婚といった夫婦関係を持つ鳥もいます。一夫多妻の様式を持つ種は、オオヨシキリやキジなど草地性の鳥に多く、質の良いなわばりでは雌が1羽で子育てを行うことができることが条件となっているようです。一妻多夫の鳥には湿地に巣を作るシギやチドリの仲間がいますが、これらの種では巣が頻繁に襲われるため、巣の数を増やして分散させることが有利にはたらくと考えられています。

鳥の博物館のミニジオラマ

標本を実際の生態に近い状況で展示するため、生息環境の模型や実物を背景に入れ込んで立体的に製作したものを、ジオラマと呼びます。鳥の博物館では、2階の手賀沼コーナーの展示のような実際の大きさを再現したジオラマだけでなく、移動可能なミニジオラマを多く製作しています。

今回の企画展では、繁殖に関わるジオラマを中心に、鳥の子育てにかかわる行動を展示しました。

工夫に満ちた鳥の繁殖の世界をお楽しみください。

多夫多妻の鳥



▲総排泄孔を見せて雄（右）に求愛するイワヒバリの雌（左）
撮影：原星一氏

イワヒバリは高山の森林限界近くに生息する小鳥です。雌は群れを構成する複数の雄に対して求愛し、ヒナの世話はそれぞれの巣の雌と複数の雄で行います。高山のような餌の乏しい環境では、つがい相手の雄1羽では繁殖がうまくいかないため、このような複雑な社会が進化したと考えられています。

つがい相手を選ぶ



▲コガモのつがい。カモ類は秋から冬にかけてつがいを作り、一緒に繁殖地へ渡るといわれる。

自分の子孫をより多く残すためには、繁殖のパートナーとなる相手の質が高いことが重要です。たとえば、餌を捕まえる能力などの生き残る力が優れていれば、より多くの子孫を残すことができるでしょう。より質の高いパートナーを選ぶためにいろいろな基準でえり好みします。

繁殖とさえずり



▲止まってさえずるオオセツカ。「チュクチュクチュク…」と鳴いて雌に存在をアピールし、周囲の雄になわばりを主張する。

つがいを作るために、多くの鳥の雄は声を使ってつがい相手の候補にアピールします。その鳴き声をさえずりと呼びます。さえずりには、他の雄に対し自分の繁殖のためのなわばりを主張する機能もあると考えられています。さえずりは繁殖行動と関わりの深い鳴き声なのです。

声によるつがいの相手の選び方



▲スゲヨシキリに近縁なコヨシキリ。コヨシキリはさえずりの複雑さと雌に好まれるかどうかには関係がないようだ。

雌はどのようにさえずりから雄を選ぶのでしょうか？ヨーロッパに分布するスゲヨシキリという種では、さえずりに含まれるレパートリーの種類が多いほど雌と早くつがいになれるという研究結果があります。このケースでは、年長で経験のある雄ほど、多くの歌を学習していることから、レパートリーの数が指標になっていると考えられます。

エリマキシギの求愛行動



▲エリマキシギの雌(右)は、雄(左)より一回り小さく、地味な褐色です。雄の中には、雌に近い大きさと羽色で、雌に擬態してなわばりに侵入し、雌と交尾するものもいます。

雄は、雌を引きつけるためにさまざまな方法で求愛行動をします。エリマキシギというシギの仲間では、雄はレックと呼ばれる踊り場に集まって、集団で雌に求愛します。黒い襟巻きの雄はなわばりを張るのに対し、白い襟巻きの雄はなわばりの周囲でレックにやってきた雌と交尾します。

鳥の浮気



▲オオジュリンは湿った草地で繁殖するホオジロの仲間。調べられたのはイギリスの集団ですが、日本のオオジュリンではどうでしょうか。

最近のDNAによる親子判定によって、一夫一妻の鳥でも、配偶関係にない雄が遺伝的な父親である種が90%以上であることが明らかになりました。

一夫一妻の種で最もこの割合が高い報告がある種はオオジュリンで、55%のヒナの父親がつかい相手ではなかった例が知られています。

鳥の巣の役割



▲繁殖が終わった後のタマシギの巣。捕食者に狙われやすいので、ヒナがふ化するとすぐに巣立ち、ほとんど戻らない。

私たちの人間の家と鳥の巣は、かなり役割が異なります。鳥は、巣を拠点として一年中使うわけではなく、自由に動くことのできない卵とヒナの置き場所として一時的に使っているにすぎません。

子育てが終われば、巣を利用することはなく、夜もそれぞれのねぐらを使って過ごします。

一戸建て？それとも集合住宅？



▲ウミネコの集団繁殖地。餌場は島から離れているので、ここでは互いに餌を採るなわばりを防衛する必要がない。

一か所に集まって繁殖する鳥がいる一方で、それぞれ離れて巣を作る鳥もいます。これには、餌がまとまって沢山あるかどうかに関係しているようです。餌が少なければ、他の個体から独占できるなわばりを防衛した方が有利ですが、餌が十分にあれば、そのようなコストをかける必要はありません。

集団で繁殖するメリット



▲コロニーの上を飛ぶコアシサシ。外敵が侵入すると、「キリッ、キリッ」と鳴きながら上空を飛んで威嚇する。

集団で繁殖すると、捕食者から身を守るのに役立つことがあります。たとえば、コアシサシでは集団繁殖地の中に外敵が入ってくると、親鳥は鳴き声を上げながら威嚇して追い払います。この時に、数が多い方が有利なので、集団で子育てをすることにメリットがあるのです。

鳥の巣の形



▲無人島で繁殖するオオミズナギドリの巣穴。卵は1個で雌雄交代で抱卵する。

鳥の巣には、一般的な皿型の形の他にもいろいろな形があります。木のうろや土に穴を掘るものもいます。また、ほとんど巣らしい巣をつくらず、地面や岩の割れ目に卵を産むだけの鳥もいます。

それぞれの生息環境に適応し、より安全で見つかりにくい巣をつくる行動が進化しています。

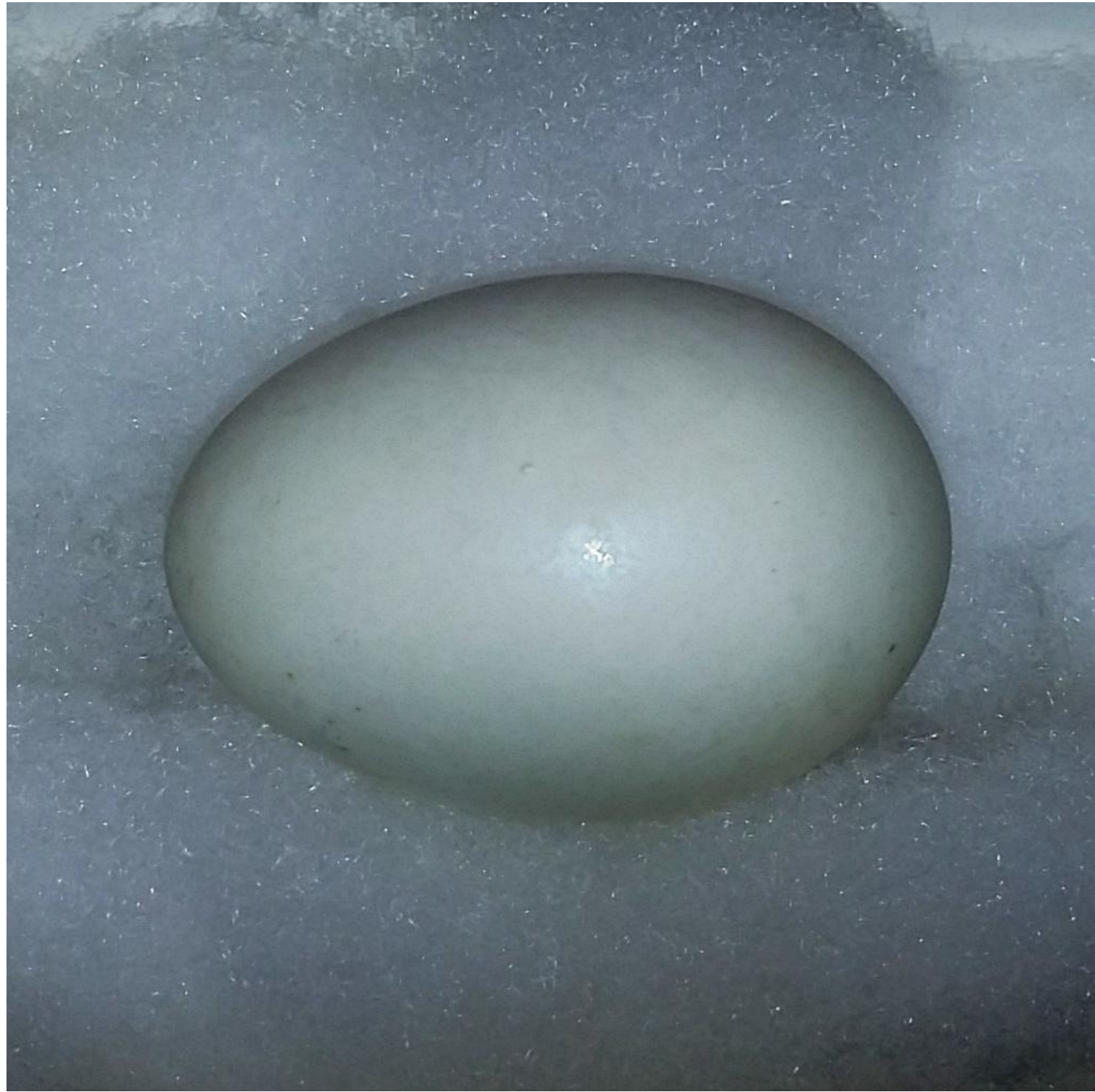
巣の捕食対策



▲カルガモの卵をくわえて飛ぶハシブトガラス。カラス類は多くの鳥の卵やヒナの捕食者になる。

鳥の繁殖が失敗する原因で最も多いのが、巣での卵とヒナの捕食です。巣を襲われてしまえば、その回の繁殖の努力は全て水の泡になってしまいます。そのため、巣を作る場所の選択や巣の捕食を防ぐための行動は、より多くの子孫を残せるように最適な方法に進化したのです。

すべての鳥は卵から



▲マガモの卵。鳥は体温が40℃以上と高いので、受精後はすぐに体の外に出す必要がある。

すべての鳥が雄と雌の配偶子から子どもをつくる有性生殖で、卵から子どもが成長する卵生です。鳥に近い系統の爬虫類では、雌の体内で卵が孵化する卵胎生の種もいますが、鳥では見つかっていません。体温が高いことと、飛ぶために体を軽くしなければいけないという制約が、鳥の繁殖方法を制限しています。

抱卵



▲オオヨシキリの発達した抱卵斑。皮膚の下の血管も発達している。抱卵が終わると羽毛が生えてきて、元通りになる。

卵は親鳥による保護がなければヒナになることができません。卵を抱く親の腹の羽毛は抜けて皮膚が露出します。これを抱卵斑といいます。カツオドリなど一部の種では、足のみずかきで卵を温めます。

抱卵にかかる日数は大きな卵を産む種で長い傾向があります。

卵は何個産めばいい？



▲オオヨシキリの巣と卵。オオヨシキリの一腹卵数は4~6個で、この巣では5個。

雌は卵を無限に産むことができるわけではありません。産まれたヒナを育てることができる餌の量にも制限があります。そのため、1回の繁殖で産む卵の数は大まかに決まっており、その数のことを、一腹卵数といいます。一腹卵数は、少ない種では1個、多い種では10個以上になります。

托卵



▲オオヨシキリの巣に托卵したカッコウの卵（矢印）
撮影：原星一氏

カッコウの仲間は、他種の巣に自分の卵を産み、抱卵とヒナの世話を全て宿主(托卵される側)に押し付けます。これを托卵といいます。

宿主は托卵を見破って捨てる手段を進化させますが、カッコウ側も宿主により似せた卵を産むことで対抗します。托卵をめぐる競争は終わることなく続くのです。

鳥のヒナの成長



▲成長したカルガモのヒナと雌親(右手前)。まだ親の世話は受けているが、親とほぼ同じ大きさまで成長している。

鳥のヒナは、とても速く成長します。同じくらいの体重のウサギとマガモを比べると、マガモはウサギのおよそ3倍くらいの速度で親と同じ大きさになります。成長の速い小鳥では、孵化から巣立ちまでおよそ2週間くらいです。多くの鳥では、巣立ち後は大きさだけで親とヒナを見分けるのは難しくなります。

早成性と晩成性



▲早成性のカムムリウミスズメは、
孵化後1~2日で親に連れられて海
に出て、数十kmを一気に移動する。

ヒナの成長の速さは鳥の
グループによりさまざまです。
孵化後すぐに動き出すものを早
成性、孵化後動き出すまで時間
がかかるものを晩成性といいま
す。一般的に、巣のつくりが単
純で捕食されやすい種ほど早成
性のものが多く、安全なところ
に巣をつくる種ほど晩成性にな
る傾向があります。

兄弟間の争い



▲アマサギの兄弟。しばしば兄弟殺しが起こり、体の小さい年少の兄弟が犠牲になる。

親の持ってくる食物には限りがあるので、兄弟間で餌をめぐる競争がしばしばおこります。結果として、兄弟を殺してしまうこともあります。

大形の肉食性の鳥類では兄弟殺しがしばしば起こりますが、殺されたヒナの分の餌は、年上の兄弟に割り振られることが分かっています。

協力して子育てする鳥



▲ヘルパーが参加し共同で繁殖するエナガ

一部の鳥では、巣立った若鳥が親元を離れずに、親の次の子育てを手伝うことがあります。自分と血縁のある個体を育てることで、自分に近い遺伝子を持つ子孫を残せるのです。

オナガでは、群れのうちでつがいになれなかった鳥と未熟な個体がヘルパーとして繁殖を手伝うことが知られています。



巣をつくる雄のセツカ

セツカの社会は一羽の雄が複数の雌とつがいになる一夫多妻です。雄はなわぼりの草地の中にクモの糸と草を材料にして巣をつくります。雌は雄のつくった巣を気に入るとチガヤなどの草の穂を運びこんで内装をつくり、産卵します。

セツカは、日本で繁殖する鳥の中で唯一、産まれた幼鳥が同じ年に繁殖することが知られている鳥です。こうした早い成長は、現在のところ雌だけで知られています。



軒先につくられたツバメの巣

私たちが最も子育てを目にする鳥の一つはツバメでしょう。3月の終わりに渡来し、家の軒先などに泥や草を運んできてカップ状の巣をつくります。関東地方では、4～7月にかけて1～2回繁殖します。

繁殖が終わると農地や河川敷に移動し、渡りのための栄養を蓄えてから、9月ごろに再び越冬地の東南アジアなどに向けて旅立ちます。ツバメは一夫一妻で、雌雄が協力して子育てを行う一般的な鳥の一つです。



巣に入る雄のタマシギ

タマシギは水田などの湿地に棲むシギの仲間です。雄だけが抱卵やヒナの世話をを行い、雌は子育てを全く手伝いません。関東地方では、タマシギの繁殖期は5月ごろから始まり、10月ごろまで続きます。

この長い繁殖期の中で、雌は何回もつがいの相手を変えながら交尾と産卵を繰り返します。しかし、同時に複数の雄とつがいになることはないようなので、一夫一妻のつがい関係を何度も繰り返しているという見方もできるようです。





ヤマドリの雄と母子

ヤマドリは性的二型の大きな鳥です。雄は雌より大きく、長い尾を持ち、眼の周りには赤い皮膚が大きく露出しています。雄は子育てを手伝わず、雌だけが抱卵からヒナの世話までを行います。

このジオラマに使われているヤマドリは、亜種コシジロヤマドリという、日本で一番南に分布するグループです。その名の通り、雄の腰が白いのが特徴です。



S-73 ①
ヨウカ
花甲ミダリ

地上に巣をつくるヨタカ

ヨタカは夏鳥として渡来する夜行性の鳥で、森林や草地の地上に巣をつくります。卵やヒナを抱いているときには、体や翼の見事な迷彩模様が役立ちます。外敵が近付いてもじっとして地面の模様になまぎれることでやり過ごす作戦です。

日本のヨタカは、社会性などについて不明な点が多い鳥ですが、ヨーロッパの近縁種では一夫一妻で、主に雌が抱卵し、雌雄とも子育てにかかわることが知られています。



ディスプレイに使われる雄の飾り羽

フウチョウ類やキジ科の鳥の雄に見られるような、極端に大きな雄の飾り羽は、雌による雄のえり好みが原因で進化したと考えられています。雌がより派手な羽を持つ雄を選んでつがいになることで、そのような雄の子孫が増え、派手な雄ばかりになったと考えられています。

このような現象のことを「性選択」と呼び、生物の進化にとって重要な役割を占めてきたことが分かっています。



サンコウチョウの雄と巢

サンコウチョウは森林に渡来する夏鳥で、雄は長く伸びた尾羽と目の周りの青が特徴的です。

さえずりは「ツキ、ヒ、ホシ、ホイホイホイ」と聞きなされることから「三光鳥」の名が付いたという説があります。

木の細かい枝やつる植物の二又になったところに針葉樹の樹皮とコケなどを使った巣をつくります。繁殖は雌雄が共同で行い、雄も抱卵とヒナの世話を手伝います。



ヒメガマにつくられたヨシゴイの巣

ヨシゴイは小形のサギの仲間で、日本には主に夏鳥として渡来します。ヨシ原の中でヒメガマを好んで巣をつくりますが、場所によってはルーズコロニーと呼ばれるゆるやかな集団で繁殖することが知られています。

手賀沼では、以前はこのようなコロニーが沼の各所で見られましたが、現在ではわずかに見られるだけになってしまいました。



カイツブリと浮き巣（模型）

水辺で繁殖する鳥の中には、水上に巣をつくるものがあります。このような巣では、歩いて巣の近くに侵入する捕食者から卵を守ることができます。

カイツブリは水上に植物の茎や葉を積み重ねて浮き巣をつくりまします。このままだとカラスなどの捕食者から丸見えになってしまうので、巣を離れるときには、卵の上に葉を乗せてカモフラージュすることがあります。

*このジオラマは、カイツブリの巣を再現するために製作したもので、実物ではありません。



カワラヒワと巢

カワラヒワは我孫子市内の街路樹などでも普通に繁殖するアトリの仲間です。カワラヒワは集団お見合いをすることが知られており、4月ごろには雌雄が集まって賑やかに鳴き交わしているのを見ることが出来ます。営巣はルーズコロニーというゆるやかな集団で行うことが多いようです。冬になって木の葉が落ちると、メジロの巣よりも少し大きい皿型の巣がかかっているのを見つけやすくなるでしょう。



ウズラのつがいと巣

ウズラの卵は私たちにも馴染みのある食べ物ですが、巣を見たことのある方はほとんどいないのではないのでしょうか。それもそのはず、草の中につくられるので見つけるのがとても難しいのです。

このジオラマは、手前で卵のある巣に入ろうとしているのが雌、奥の草の中にいるのが雄です。ウズラの婚姻形態は乱婚または多夫多妻とされています。



ヒバリと巣

ヒバリは地上で巣をつくる小鳥の代表格です。地面にくぼみをつくり、枯れ草を使っておわん形の巣をつくります。卵やヒナは、地面と良く似た目立たない色をしています。

ヒバリののような地上で巣をつくる鳥は、一度巣にいるところを飛び立たせてしまおうとそのまま放棄してしまふことがあるので、もし巣を見つけたら出来るだけ早くその場を立ち去りましょう。



コゲラと巣

キツツキの仲間は、鋭い嘴を使って自分で木に穴をあけて巣をつくることができます。木の穴は外敵から身を守るのには格好の棲みかたで、卵やヒナが捕食される可能性は他の形態の巣に比べてずっと低いことが利点です。

ただし、この安全な木の穴も、自分で穴を掘れない他の鳥にとっては巣になる場所が限られていることや、巣をつくるのには時間がかかることはデメリットです。



フクロウ科
フクロウ

巣箱に入るフクロウ

鳥の博物館では、カメラを付けた巣箱を設置してフクロウの子育てを観察しています。フクロウは大きな木にできた洞を巣としますが、天然の洞ができるような大きな木は減っており、巣箱をかけることによってフクロウに繁殖の場所を提供しています。巣箱を使って繁殖するのは、フクロウのようにもともと木の穴を巣として利用する鳥で、樹上や地上に巣をつくる多くの鳥は巣箱に入りません。



ハシボソガラスに卵を捕食されるカルガモ

カルガモは、関東地方の平地で普通に繁殖する唯一のカモです。水辺の草地の中に、草でつくった巣の上に自分の綿羽（ダウン）を敷きつめて、そこに最大12個ほどの卵を産みます。

カモ類が子だくさんな理由の一つは、しばしば外敵にヒナや卵を食われてしまうためです。このジオラマでは、2羽のハシボソガラスに巣を襲われています。親鳥は羽を広げて威嚇していますが、孵化間近だった1個の卵が捕食されてしまいました。



擬傷(ぎしょう)するコチドリ

コチドリは夏鳥として渡来し、4月ごろから河原や畑などの地上の窪みに小石などを敷きつめて巣をつくります。外敵が巣に近づくと、ばたばたと羽ばたき、まるでケガをして飛べないかのようにふるまいます。そして、次第に外敵を巣から引き離していき、最後には飛んで逃げます。このように、外敵の注意を自分に引き付けて、卵やヒナの捕食をまぬがれようとする行動を「擬傷」といいます。地上で巣をつくる鳥ではしばしばみられる行動です。



魚を運ぶウトウ

ウトウは嘴にある角のような突起が特徴的なウミスズメの仲間で、北日本の島で繁殖します。海の中に潜る時は翼を使って潜水し、イカナゴやイワシ類などの小形の魚を捕らえます。

ヒナが生まれると、遠くの餌場と巣穴のある島を毎日往復して、餌を運びます。餌場までの距離は、最大150kmにもなります。その時にできるだけ多くの魚を持ち帰れるよう、嘴に何匹もの魚をくわえて持ち帰るのです。



オオヨシキリと巢

オオヨシキリはヨシ原に棲む小鳥で、5月ごろに渡来し、雄は「ギョギョシ、ギョギョシ」と囀ります。ヨシの中で生活し、ヨシの莖にカップ状の巢をつくります。

オオヨシキリは一夫多妻の社会で、1羽の雄のなわばりに2羽から最大5羽の雌が入って繁殖します。巢作りと子育ては、ほとんど雌だけが行い、雄はあまり手伝いません。雄は昼夜問わずにさえずり、できるだけ多くの雌を獲得しようとします。



キジの雄と母子

キジは日本の国鳥で、雄は長い尾羽や顔に赤い皮膚が露出しているのが特徴的です。一方、雌は全身褐色が目立たない姿をしています。農地や河原などの開けた環境に生息し、草の中に巣をつくって最大15個の卵を産みます。

キジは一夫多妻の鳥で、子育ては雌だけが行います。ヒナは孵化してすぐに雌親に連れられて巣を離れます。外敵が近付くと、ヒナは雌が出す声に応じて走って逃げたり、その場にうずくまったりします。



オオバンのヒナと巣

オオバンは我孫子市の鳥で、手賀沼でも繁殖しています。巣は湖岸のヨシ原の中で、特にヒメガマという一番深いところに生育する植物を好みます。草の茎を積み重ねてつくった巣の上に卵を産みます。孵化するとすぐに巣を離れますが、しばしばヒナを休ませたりする場所として巣を使うことがあります。このジオラマでは、孵化後35日ほどが経過したヒナを再び巣に連れてきて餌をやっている様子を再現しています。



バンと巢

バンはオオバンよりも小さいクイナの仲間で、額が赤いのが特徴です。オオバンと同様に水辺に暮らし、周りの枯れた葉や茎を積み上げて厚みのある巣をつくり、内側には葉を敷き詰めます。

バンは、同じ場所で繁殖する別のバンの巣や、同じ環境で繁殖するヨシゴイにまでも托卵することがあります。巣が外敵に襲われやすい場所では、自分の卵の場所を分けておくほうが多く子孫を残すために効果的なのかもしれません。



オナガの巣とヒナ

オナガと巢内のヒナ

オナガは長い尾と水色の翼を持ったカラスの仲間、柏市の鳥にも指定されている身近な鳥です。樹上に枯れ枝や木の根などを使って雌雄で協力して巣を作り、5~8個の卵を産みます。

オナガは卵やヒナの捕食者であるカラス類から巣を守るために、小形の夕方の仲間のツミを利用することが知られています。ツミの巣の近くでは、ツミがカラス類を追い払ってくれるため、オナガがまとまって巣をつくることがあります。

スズメの観察のポイント



▲カラスの体羽を巣材として
巣に運ぶスズメ。

- ・繁殖期：2～9月
- ・巣をつくる場所：人家や木洞
- ・一腹卵数：4～8個
- ・抱卵日数：11～12日
- ・観察のポイント：
最も人の近くで繁殖する鳥の一つです。人家の屋根のすきまなどに好んで巣をつくります。交尾の時には独特の高い声で鳴くので注意してみましよう。

ツバメの観察のポイント



▲田んぼの泥を集めて口にくわえるツバメ。巣は前の年に使ったものを補修して使うことがよくある。

- 繁殖期：4～7月
- 巣をつくる場所：家の軒先
- 一腹卵数：3～7個
- 抱卵日数：13～14日
- 観察のポイント：
田んぼなどから運んできた泥と枯れ草を固めて巣を作ります。間近に巣を観察できるので、巣づくりから巣立ちまで繁殖の一部始終を観察できます。

ヒヨドリを観察のポイント



▲ヒヨドリは、雌のみが抱卵するが、ヒナの世話は雄も手伝う。

- ・繁殖期：5～8月
- ・巣をつくる場所：樹上
- ・一腹卵数：3～5個
- ・抱卵日数：13～14日
- ・観察のポイント：
ヒヨドリの巣は、住宅地の生垣の中でも見つかりますが、木の葉でうまく隠されていることが多いです。卵は全体にあずき色の小さい斑があります。

ムクドリを観察のポイント



▲ムクドリは、しばしば同種の巣に卵を産みこんで育てさせる種内の托卵を行うことが知られている。

- ・繁殖期：3～7月
- ・巣をつくる場所：人家や木洞
- ・一腹卵数：4～7個
- ・抱卵日数：12～13日
- ・観察のポイント：
ムクドリは、巣箱も良く利用するほか、人家の戸袋などの人工物もよく利用します。卵は水色で無斑です。繁殖場所を確保するため、巣穴をめぐる争いが繁殖期に入る前から見られます。

キジバトの観察のポイント



▲キジバトの2羽のヒナ。
親の消化管から分泌されるピ
ジョンミルクという栄養物質
を飲んで育つ。

- ・繁殖期：ほぼ一年中
- ・巣をつくる場所：樹上
- ・一腹卵数：2個
- ・抱卵日数：15～16日
- ・観察のポイント：
木の枝を雑に組み合わせた
巣を作ります。人の視線には
敏感で、営巣の初期に頻繁に
見すぎると巣を放棄してしま
うので、遠くからそっと観察
しましょう。